

神社本庁別表指定神社

# 上川神社略記

北海道旭川市神楽岡公園二番地一 (〒076-1837)



## 《社紋山桜花》

神楽岡本宮 電話 (0166) 651-3151 番

FAX 651-3152 番

常磐公園頓宮 電話 221-5934 番

### 一、御祭神

主神 天照皇大御神 大己貴大神 少彦名大神

左座 豊受姫神 大物主神 天乃香久山神 建御名方神 磐田分命 敦実親王

右座 鍋島直正命 黒田清隆命 永山武四郎命 岩村通俊命

### 一、祭祀

例祭 七月二十一日(大祭)・二十日宵宮祭、二十一日・二十二日には御神輿が市内を巡る

御神幸式があります。

恒例祭 歳旦祭(二月一日)、火鑽神事(二月七日、どんど焼きに用いる清浄な火を鑽り出すお祭)

紀元祭(二月十一日)、春分祭(三月春分)、祈年祭(大祭・四月十七日)、昭和祭(四月十九日)

大祓(六月三十日)、秋分祭(九月秋分)、神嘗奉祝祭(十月十七日)、明治祭(十月三日)

新嘗祭(大祭・十月三十日)、天長祭(十二月三十日)、大祓・除夜祭(十二月三十一日)

月次祭 毎月一日、二十一日

### 一、旭川天満宮(境内社)

昭和四十一年学問・諸芸の守り神である菅原道真公の御分霊を太宰府天満宮から戴き、同

宮の西高辻信貞宮司(御祭神の子孫)参向のもとにお祀りしました。

旭川のまち作りに力を尽くされた先人達は、明治二十六年七月上川地方開拓守護・旭川の鎮守として、義経台と呼ばれた現在の旭川駅付近の高台に天照皇大神をお祀りしました。

鉄道の設置やまちの発展にともない、明治三十一年に神社を六・七条通八丁目、三十五年宮下通二十一丁目にお移しし、その後、御祭神に大己貴大神・少彦名大神をはじめ左座・右座の神々を合わせてお祀りしました。大正十三年六月六日神々が鎮まる適地として、かつて上川離宮建設が決定された神楽岡に神社をお移しました。

昭和四年には賀陽宮恒憲王殿下、昭和八年には閑院宮春仁王殿下、李王塚殿下の御参拝があり、昭和十一年九月二十六日には天皇陛下が旭川に行幸の際、御使徳大寺侍従をつかわされ御幣帛を奠じ御拝を賜りました。

昭和四十三年には御鎮座七十五周年の記念事業にあたり、伊勢神宮より昭和四十五年第五十八回式年遷宮御調進の御装束(御鏡)・御神宝(御楯・御鉾)の御下附を戴きました。

平成四年右座の御祭神に岩村家御参列のもとに岩村通俊命合祀祭・御創祀百年祭を斎行しました。右座には北海道開拓、上川地方、旭川の発展に特にご功労のある方々を御祭神としてお祀りしています。

## 一、社殿、工作物

大正十三年北海道産蝦夷松材で、大正九年から四年の年月をかけ本宮並びに頓宮の社殿を造営しました。昭和十一年に百六段の石段を新設し、三十年に神居古潭石の手水舎を完成。四十二年神域に花崗岩玉垣を巡らすなど、社殿・境内地の整備を進めました。平成四年上川神社ができて百年の記念事業として社殿の大改修を行い、六年には能の上演ができる舞殿を建設しました。境内地にある鳥居、燈籠、狛犬などは、社殿造営と同様に市民氏子の方々が資金を奉納して設置されたものです。

《神楽岡の鳥》



アカハラ



アオジ

神楽岡史蹟記念碑並びに歌碑

明治天皇は北海道開拓に御心を注がれ、明治二十二年十二月二十八日に神楽岡を以て上川離宮の予定地と定められた。

これは当神社御祭神である岩村通俊命が「上川に北京を奠く議」を太政大臣に上申し、更に永山武四郎將軍が此の岡に登られ

「上川の清き流れに身をそそぎ 神楽の岡に幸行仰がん」

「畏みし神のまします位山 民仰ぐべき御幸をぞ待つ」と詠まれ、

上川離宮御造営の建白をなされたことに基づくものです。

この地は明治四十四年大正天皇が皇太子の時代に行啓され、市民生活と上川平原の豊かなるをご視察になられた地でもあり、上川神社がこの由緒深き地に鎮座するにより、この由来を後世に伝えようと昭和八年に建碑されました。

碑の後方にはこの詠を男爵永山武敏氏に揮毫戴いた歌碑が建てられています。



カワラヒワ



クロツグミ



神楽岡に関する伝説

昔、日の神チユブカムイが他の神様達とこの丘に集まって神楽をして遊んでいると、アイヌの先祖達が柳の木で木幣を作ってその神々に捧げたので、神様達は大変喜んでいつまでもいつまでも時間を忘れて神楽をつづけ人間達に神謡（カムイユーカーラ）を教えたので、アイヌ達もすっかり喜んでうかれ出し一緒に踊りをおどったので、この土地をヘイツツイウシというようになった、別にイナオサン（祭壇）とも言ったという。

昔立派なシャモ（和人）が上川コタンに來た事がある。此のシャモは一人のアイヌを案内役として忠別川を丸木舟で遡上し現在の神楽岡の上に上陸し、広々とした上川平原を眺め其の壮大さに感じ、「あゝ」と嘆声を発しついに歌い始めた。その美声が高く長く流れると案内のアイヌもついその歌につりこまれて我を忘れて手を拍ち「ヘツヘツ」と囃したてた。これからアイヌウタリ達は神楽岡のことをヘツツイウシと呼んだ。

ヘツツイはアイヌ語の囃の義、ウシは岡の意であるから囃の岡の意味となる。神楽岡にちなむ伝説の一つとして味わいたい。

ヘイツツイウシは神楽場の意であつて昔チユブカムイ（日の神）が天にいるホロケウカムイ（注・狼をさす）その他のカムイ達と此の丘に集つて歌舞したときにアイヌの先祖がイナホ（柳でつくつたもの）でヌサを作って捧げたので神々達が大いに喜ばれ、カムイユーカーラを教え手拍子揃えて舞つて見せたのでアイヌ達も自然に浮かれ出して足拍子揃えてウポポを唱えた事から此の名がついたのである。別名ナイオサニとも云われている。

（近江正一「伝説の旭川及其の附近」）

一説に、神楽岡ははるか石狩川をはさんで嵐山とともに景色はよし食物は豊かで、カムイのいる聖地として清浄なところとされていた。そして、神楽岡の聖地では、嵐山の聖地に神々があま降つて歌い舞うそのどよめきがよくきこえ、こちらの神々もついそれに唱和してヘツヘツと拍子おもしろく舞い出す、それでここをヘツツイウシといふようになった。

（伝宮本ヌマテサン媼「旭川市史」）

〔注・神楽岡の原文はナヨサニ・ナエ（イ）オサニとも伝えられている〕



ヒガラ



オオルリ



オオジシギ



エゾセンニュウ



キビタキ



カッコウ



ヒヨドリ



ハシブトガラ



シジュウカラ